

教 団 組 織 の 研 究

——天理教の場合——

小 笠 原 真 ・ 福 地 真一郎

(奈良教育大学社会学教室) (天理小学校)

(昭和58年4月27日受理)

I は じ め に

本小稿は、天理教に関する従来の研究がともすると天理教の教義に関するいわゆる教義学的研究⁽¹⁾や天理教の成立及び発展過程の歴史学的研究⁽²⁾や宗教都市天理市の地理学的研究⁽³⁾等に集中していたなかであって、比較的看過されてきた側面を補うために書かれたものである。つまり、天理教組織の今日的な姿を社会学的視点とりわけ現代天理教の構造と機能とを分析しようとするものである。そしてその際、わが国の既成宗教や新宗教の諸教団の組織との比較において、天理教のそれを把握することにも幾分努めてみようと思う。なお、予め断わっておきたいことに次のことがある。すなわち、天理教教団内の慣例によれば、「天理教」という言葉はある場合には「宗教法人天理教」という組織を指し、またある場合には「天理教の教義」を指すというように、二つの意味を持たせているが、本小稿では天理教という場合前者の意味に限定して用いることにしたいということである。

Ⅱ わが国における宗教団体の規模と天理教の位置

まず、天理教の規模をわが国の既成宗教及び新宗教の諸教団の規模との比較において把握してみると、第1表の如くである。つまり、この表も教えるように、第1に、天理教の信者数は昭和55年12月末現在約259万人であって、わが国の宗教団体の信者数による順位では第13位である。特に「幕末維新期の民衆の自主的な宗教運動として発展した一連の民衆宗教」⁽⁴⁾のなかであって、天理教の信者数約259万人という数は、例えば金光教の信者数約47万人や黒住教の信者数約22万人に比べて、いかに大きいか分かるであろう。また、この表から新宗教の日蓮正宗創価学会の信者数約1,651万人、立正佼成会のそれ約531万人、生長の家約368万人、霊友会約297万人、パーフェクト・リパティエ教団(略称P L)約271万人、仏所護念会教団約157万人等、信者数100万人を超える教団が多くみられるなかであって、天理教の約259万人は第6位を占めている。もっとも、文部省宗教課に集められた教団の報告による信者数は、「通常、教団が世帯単位に信者を数え、また氏子の意味で地域の総人口の報告をし、あるいはまた、教団創立以来の獲得信徒の延合計数を報告するものなどあって、その全合計は国家人口を上まわる結果となっている」⁽⁵⁾という問題点を含んでいるとはいえ、わが国における各宗教団体の教勢の大まかな姿を示していると考えられるから、⁽⁶⁾ いわゆる新宗教と呼ばれる宗教団体の占めるウェイトがかなり大きいといえよう。第2に、天理教の被包括団体数36,521は、大教会、分教会、布教所、海外教会の総数である

が、これは神社本庁の被包括団体数79,143に次いで第2位である。そして、このことは布教の拠点たる教会や布教所が全国各地はもとより、遠く海外のカナダ、アメリカ、メキシコ、ブラジル、ハワイ、シンガポール、台湾、コンゴ、ペルー等にまで点在しているという、まさに「布教を生命とする天理教」⁽⁷⁾ の特徴をよく示している。第3に、天理教の教師数163,233人という数は、他の宗教団体の教師数例えば第2位のパーフェクト・リバティー教団の教師数57,524人に比べても3倍弱であって著しく多いけれども、これは信者の誰にも努力次第で教師への道が開かれてい

第1表 わが国における宗教団体規模別被包括団体数、教師数、信者数、本部所在地
(昭和55年12月末現在)

順 位	宗 教 団 体 名	被包括団体数	教 師 数	信 者 数	本 部 所 在 地
(信者数による)			(人)	(人)	
1	神 社 本 庁	79,143	19,191	66,741,549	東京都渋谷区
2	日 蓮 正 宗	486	663	16,518,697	静岡県富士宮市(大石寺)
3	浄土真宗本願寺派	10,506	24,482	6,987,395	東京都新宿区(創価学会)
4	曹 洞 宗	14,711	16,523	6,751,231	京都市下京区
5	浄 土 宗	7,102	9,178	6,008,800	東京都港区
6	真 宗 大 谷 派	9,023	14,365	5,535,300	京都市東山区
7	立 正 佼 成 会	612	13,287	5,308,241	京都市下京区
8	高野山真言宗	3,590	5,792	4,396,790	東京都杉並区
9	生 長 の 家	119	11,245	3,676,144	和歌山県伊都郡
10	不 動 宗	88	578	3,605,010	東京都渋谷区
11	霊 友 会	24	3,128	2,971,600	岡山県倉敷市
12	パーフェクト・リバティー教団	360	57,524	2,707,751	東京都港区
13	天 理 教	36,521	163,233	2,592,020	大阪府富田林市
14	日 蓮 宗	5,226	7,447	2,282,103	奈良県天理市
15	仏所護念会教団	9	3,725	1,573,824	東京都大田区
16	真言宗智山派	2,868	3,540	1,533,006	東京都港区
17	出雲大社教	244	5,254	1,101,389	京都市東山区
18	真言宗豊山派	2,590	2,488	1,072,064	島根県簸川郡
19	念 法 真 教	88	4,072	879,630	東京都文京区
20	真 如 苑	464	3,608	856,992	大阪市鶴見区
21	世界救世教	550	4,410	831,956	東京都立川市
22	神 社 本 教	94	102	818,800	静岡県熱海市
23	石 鎚 本 教	171	2,328	737,661	京都市山科区
24	御 嶽 教	694	3,749	735,310	愛媛県西条市
25	妙智会教団	393	2,727	705,426	奈良市二名町
26	臨済宗妙心寺派	3,430	3,509	695,532	東京都渋谷区
27	出 雲 教	32	237	635,900	京都市右京区
28	善 隣 会	63	141	630,664	島根県簸川郡
29	天 台 宗	3,319	4,388	608,960	福岡県筑紫野市
30	法 相 宗	262	456	575,011	大津市坂本本町
⋮					奈良市西ノ京町
34	金 光 教	1,682	4,294	471,341	
⋮					岡山県浅口郡
64	黒 住 教	376	3,245	215,090	岡山市尾上

資料出所：文化庁編『宗教年鑑』（昭和56年版）ぎょうせい昭和57年64～91頁より作成。

第2表 わが国における宗教団体規模別被包括団体数及び教師数に対する信者数の割合（昭和55年12月末現在）

順 位	宗 教 団 体 名	被包括団体数に対する信者数の割合	教師数に対する信者数の割合
(信者数による)			
1	神 社 本 庁	843.3	3,477.8
2	日 蓮 正 宗	33,989.1	24,915.1
3	浄土真宗本願寺派	665.1	285.4
4	曹 洞 宗	458.9	408.6
5	浄 土 宗	846.1	654.7
6	真 宗 大 谷 派	613.5	385.3
7	立 正 佼 成 会	8,673.6	399.5
8	高野山真言宗	1,224.7	759.1
9	生 長 の 家	30,892.0	326.9
10	不 動 宗	40,966.0	6,237.0
11	霊 友 会	123,816.7	950.0
12	パーフェクト・リバティー教団	7,521.5	47.1
13	天 理 教	71.0	15.9
14	日 蓮 宗	436.7	306.4
15	仏所護念会教団	174,869.3	422.5
16	真言宗智山派	534.5	433.1
17	出 雲 大 社 教	4,513.9	209.6
18	真言宗豊山派	413.9	430.9
19	念 法 真 教	9,995.8	216.0
20	真 如 苑	1,847.0	237.5
21	世 界 救 世 教	1,512.6	188.7
22	神 社 本 教	8,710.6	8,027.5
23	石 鎚 本 教	4,313.8	316.9
24	御 嶽 教	1,059.5	196.1
25	妙 智 会 教 団	1,795.0	258.7
26	臨濟宗妙心寺派	202.8	198.2
27	出 雲 教	19,871.9	2,683.1
28	善 隣 会	10,010.5	4,472.8
29	天 台 宗	183.5	138.8
30	法 相 宗	2,194.7	1,261.0
⋮			
34	金 光 教	280.2	109.8
⋮			
64	黒 住 教	572.0	66.3

資料出所：文化庁編『宗教年鑑』（昭和56年版）ぎょうせい
昭和57年64～91頁より作成。

る点で、天理教を活力のある生きた宗教にしているところである。そして第4に、信者数100万以上の大教団の本部所在地をみると、東京都区部、京都市といったつまり大都市に集中しているなかであって、天理教の本部はパーフェクト・リバティー教団の富田林市と共に、天理市といういわゆる地方都市にある点でも特徴がある。

次いで、第1表に基づいて、被包括団体数に対する信者数の割合及び教師数に対する信者数の

割合を示したものが第2表である。そして、この表によって、第1に、被包括団体数に対する信者数の割合をみると、天理教の71.0は他の教団のそれに比べてはるかに低い数値であるが、このことは、信者が約259万人という大きな数にも拘らず小さなグループに分かれて教会に属していること、別言すれば、大教団であるにも拘らず末端の組織まで小分割されていることを示している。第2に、教師数に対する信者数の割合をみると、天理教の15.9はパーフェクト・リバティー教団の47.1と同様に極めて低い数値を示している。このことは、教師が前述の小分割された信者に対し、積極的に対応しようとする姿勢を窺うことが出来、ここにも「布教を生命とする天理教」の一端が読みとれる。

Ⅲ 天理教教会本部の組織と一般会計の最近10年間の歳入・歳出決算状況

さて、これよりわれわれは天理教の教会本部組織について分析検討を試みることにする。まず、天理教は明治21年に初めて本部の組織を確立するが、途中8回の改組を経て、⁽⁸⁾ 昭和43年12月に今日の組織が出来あがったのである。従って今それを図式化すると第1図の如くである。

では、ここでこの組織の主な職務内容を説明するば次の如くである。

^{しんばしら}真柱——本来は仏塔などの中心に立てる柱という意味であるが、これを天理教では比喩的に用いて代表者を意味する。そして、昭和20年までは「真柱」という言葉よりも、宗教法規上の「本部長」、「教長」、「管長」等の言葉が一般に用いられていたが、「お屋敷」(教会本部)内では「真柱」という言葉が普通に用いられる言葉であった。ところが、その後は一般にも「真柱」が全面的に用いられるようになってきている。天理教教規においても「管長」の代りに「真柱」が用いられている。そして、この教規によって定められているところによると、「真柱は教祖の血統者の系譜に基き、本部員会議において推戴することになっている」⁽⁹⁾

この真柱の下に「^{うちとうりよう}内統領」及び「^{おもてとうりよう}表統領」というそれぞれ1名の代表者が置かれ、教務を分担している。

内統領——(1)祭儀及び教義に関すること、(2)神殿、教祖殿及び祖霊殿に関すること、(3)おはこび及び別席に関すること等の教会本部内の教務を主に司っている。⁽¹⁰⁾

表統領——(1)布教に関すること、(2)集会の招集及び解散に関すること、(3)教人の登録及び進退の裁決に関すること等の対社会的な教務を中心としている。また、宗教法人「天理教」の代表役員となって、法人の事務も総理している。なお、この表統領の教務を行うところを「教庁」と呼んでいる。⁽¹¹⁾

そして、この内統領及び表統領の教務を速かに遂行するために、更に以下の組織に細分されている。

内統領室——内統領の教務を処理するために設けられた部署の一つで、そのなかに室掛、内儀掛、玄関掛、詰所掛、修練掛が置かれている。

祭事室——祭儀掛、神殿掛、教祖殿掛、祖霊殿掛、墓地掛が置かれている。

御用方室——おはこび掛、別席掛、御供所掛が置かれている。

おやさとかた管理室——管理掛が置かれている。

修養科——修養科生の教化育成に関することを行う。

会計室——収入掛、支出掛、計理掛、煮炊場掛が置かれている。

保安室——境内掛、消防掛が置かれている。

表統領室——総務課、世話課、調査課、渉外課、総合案内課が置かれている。

教務部——教会課、教区課、宗教法人課が置かれている。

国内布教伝道部——布教一課、布教二課、講習課、福祉課が置かれている。

海外布教伝道部——連絡課、アジア課、アジア二課、アメリカ課、ヨーロッパ課、アフリカ課、オセアニア課、翻訳課が置かれている。

道友社——天理教教会本部教庁の出版部及び広報部に相当する機関である。現在は業務課、編集課、写真課、出版課、文化課が設けられている。

信者部——輸送課、運営課、炊事課、公衆衛生課が置かれている。主として信者の輸送・宿泊・食事に関する業務を分担し、信者が「ちば」⁽¹²⁾を慕い、信仰の喜びをもって、親里へ帰ってこられるように、支障のないよう円滑な世話をしている。

経理部——収入課、支出課、計理課、用度課、管財課が置かれている。

営繕部——営繕課、資材課、電気課、電話課、水道課、技術班が置かれている。

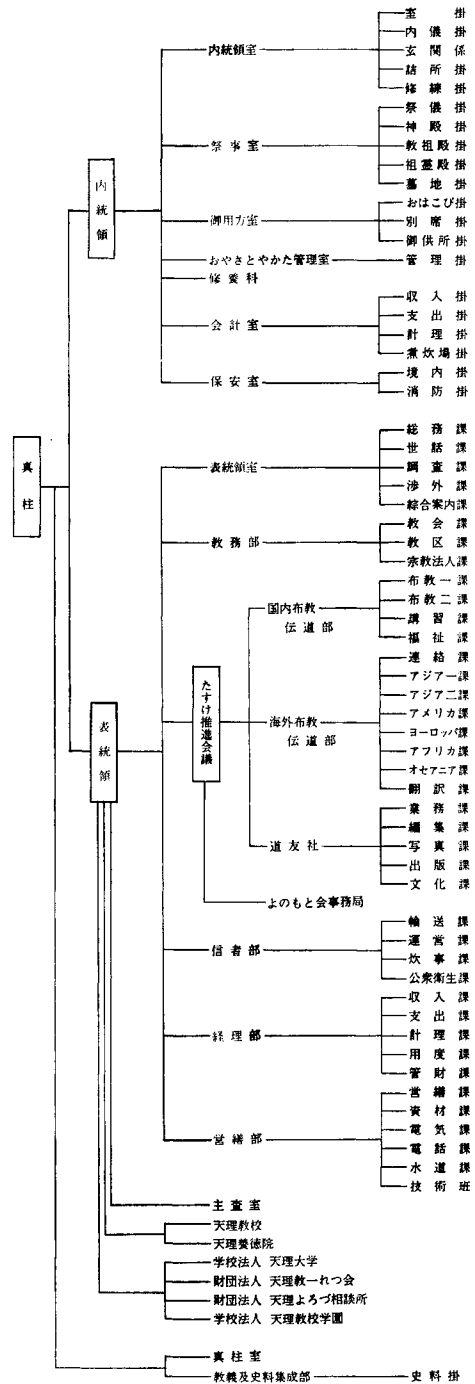
主査室——表統領に直属する機関であり、教内の刊行物、映画フィルム等の検閲に関することを扱う。⁽¹³⁾

天理教校——天理教の教義に基づく修練機関として宗教法人天理教が経営する学校で、本科（2年）、専修科（2年）、第二専修科（5年）に分かれている。⁽¹⁴⁾

天理養徳院——広く社会の恵まれない境遇のもとにある児童を、父母に代って養育することを目的として、明治43年4月1日設立された。収容児童を天理教教義に基づいて、品性正しく情操豊かな健全な人間に育てることを養育理念としている。⁽¹⁵⁾

学校法人天理大学——天理大学、同付属施設（天理図書館、天理参考館）、天理高等学校第一部（全日制）、同第二部（定時制、天理准看護婦養成所を含む）、天理中学校、天理小学校

第1図 天理教教会本部の組織図



資料出所：天理大学おやさと研究所編『天理教事典』天理教道友社 昭和52年248～249頁より引用。

及び天理幼稚園の運営に当たっている。これらの諸学校は、それぞれ学校教育法に則った教育を施すと共に、天理教の教義に基づく信条教育を行うことを目的としている。⁽¹⁶⁾

財団法人天理教一統会——教内子弟の扶育・教養を目的とし、昭和3年10月18日に創立された。単に学資を給与するだけでなく、将来の天理教の担い手としての人材を育成するための機関である。⁽¹⁷⁾

財団法人天理よろづ相談所——天理教教義に基づき、広く精神的・肉体的に悩むもの^{たす}に救けの手を差し伸べようとする機関であって、昭和10年10月「天理よろづ相談所」として開設され、昭和41年4月に財団法人となり現在の姿となった。その組織は身上部、事情部、世話部の三部門から成り、身上部は現代医学の粋を集めた医療設備をもって患者の診療に当たり、事情部は天理教の信仰に基づいて人々の苦悩の解決指導に当たり、世話部は生活上の諸問題及び医療従事者の養成に関する世話を行う。⁽¹⁸⁾

学校法人天理教校学園——従来の宗教法人天理教の経営する天理教校の付属高校を新設経営するに当たり設立されたものである。天理教校付属高校は、教育基本法及び学校教育法による教育と共に、天理教の教義に基づく信条教育を行い、天理教校に繋がる教育により、将来の布教専従者に必要な教理と教養、実際の布教経験をつませることを方針としている。⁽¹⁹⁾

以上の内統領及び表統領の組織の外に、真柱直属の組織として真柱室と教義及史料集成部があり、それぞれ次の教務を担当している。

第3表 天理教教会本部一般会計の最近10年間の歳入決算状況

年度		46	47	48	49	50
項目						
決算額 (千円)	歳入総額	5,699,034	7,714,425	11,950,855	17,844,533	29,821,437
	御供金収入	5,464,192	7,205,494	11,226,414	17,437,617	27,762,675
	雑収入	55,644	98,385	120,080	213,998	293,519
	前年度歳計剰余金	179,198	410,546	604,361	192,918	1,765,242
構成比 (%)	歳入総額	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
	御供金収入	95.9	93.4	93.9	97.7	93.1
	雑収入	1.0	1.3	1.0	1.2	1.0
	前年度歳計剰余金	3.1	5.3	5.1	1.1	5.9
年度		51	52	53	54	55
項目						
決算額 (千円)	歳入総額	18,216,230	19,949,934	22,398,584	24,320,448	24,422,103
	御供金収入	15,192,583	16,495,585	18,575,809	21,113,797	20,869,185
	雑収入	616,938	1,867,554	1,179,479	1,244,993	1,271,797
	前年度歳計剰余金	i)2,406,709	1,586,795	2,643,296	1,961,658	2,281,121
構成比 (%)	歳入総額	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
	御供金収入	83.4	82.7	82.9	86.8	85.5
	雑収入	3.4	9.4	5.3	5.1	5.2
	前年度歳計剰余金	13.2	8.0	11.8	8.1	9.3

資料出所：天理教道友社の『天理時報』に発表された天理教教会本部一般会計の昭和46年度より昭和55年度までの歳入決算報告より作成。

i) 特別会計からの繰戻し金を含む。

第4表 天理教教会本部一般会計の最近10年間の歳出決算状況

年度		46	47	48	49	50	51	52	53	54	55
項目											
歳出総額	歳出総額	5,699,034	7,714,425	11,950,855	17,844,533	29,821,437	18,216,230	19,949,934	22,398,584	24,320,448	24,422,103
	祭務費	12,048	23,431	41,278	38,481	40,143	37,341	25,137	23,496	22,097	27,921
	出向費	6,543	7,997	1,444	5,311	14,510	837	7,257	637	1,163	1,119
	教義及史料集成費	8,746	9,111	9,739	12,011	22,410	30,657	35,034	18,530	30,207	20,790
	内事総合諸費	218,174	258,878	270,437	340,682	397,639	451,333	493,300	498,193	588,245	625,061
	やしき整備費	1,893,564	2,185,413	1,925,603	3,346,556	1,549,169	2,302,304	4,444,661	5,066,075	4,454,730	3,500,505
	回付金	2,949,414	3,523,945	4,105,063	5,459,246	6,881,528	7,303,357	7,295,054	7,827,664	8,437,114	10,779,240
	予備費	—	1,290	4,373	7,004	13,009	3,608	5,194	2,331	5,771	2,156
	繰越金	410,546	604,361	192,918	1,764,242	2,403,030	1,586,795	2,643,296	1,961,659	2,281,121	1,965,312
	積立金	200,000	300,000	—	—	—	—	—	—	—	—
	特別会計へ i)	—	800,000	5,400,000	6,870,000	12,700,000	—	—	—	—	500,000
	繰入金 ii)	—	—	—	—	5,800,000	6,500,000	3,000,000	2,000,000	3,000,000	2,000,000
	iii)	—	—	—	—	—	—	2,000,000	5,000,000	5,500,000	5,000,000
構成内比	歳出総額	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
	祭務費	0.2	0.3	0.5	0.2	0.1	0.2	0.1	0.1	0.1	0.1
	出向費	0.1	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	教義及史料集成費	0.2	0.1	0.1	0.1	0.1	0.2	0.2	0.1	0.1	0.1
	内事総合諸費	3.8	3.4	2.3	1.9	1.3	2.5	2.5	2.2	2.4	2.6
	やしき整備費	33.2	28.3	16.1	18.8	5.2	12.6	22.3	22.6	18.3	14.3
	回付金	51.8	45.7	34.3	30.6	23.1	40.1	36.6	34.9	34.7	44.1
	予備費	—	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	繰越金	7.2	7.8	1.6	9.9	8.1	8.7	13.2	8.8	9.4	8.0
	積立金	3.5	3.9	—	—	—	—	—	—	—	—
	特別会計へ i)	—	10.4	45.2	38.5	42.6	—	—	—	—	2.0
	繰入金 ii)	—	—	—	—	19.4	35.7	15.0	8.9	12.3	8.2
	iii)	—	—	—	—	—	—	10.0	22.3	22.6	20.5

資料出所：天理教道友社の『天理時報』に発表された天理教教会本部一般会計の昭和46年度より昭和55年度までの歳出報告より作成。

- i) 教祖九十年祭（昭和47～50年度）及び教祖百年祭（昭和55年度）特別会計へ
- ii) おやさとやかた建築特別会計へ
- iii) 礼拝場建築特別会計へ

第5表 天理教教庁一般会計の最近10年間の歳出決算状況

年度		46	47	48	49	50	51	52	53	54	55
項目											
歳出総額 決算額 (千円)	歳出総額	3,269,379	3,855,420	4,464,545	5,852,487	7,488,346	7,922,412	7,962,719	8,516,670	9,157,392	11,648,062
	布教伝道費	313,713	411,885	495,394	442,863	632,121	640,513	653,930	771,133	924,345	1,020,549
	文教費	1,470,748	1,587,402	1,829,311	2,989,215	3,727,445	3,234,753	3,183,366	3,054,047	3,093,946	3,956,942
	厚生費	283,500	359,000	430,000	557,600	639,000	1,213,000	781,000	824,000	871,000	922,000
	営繕費	402,112	519,580	581,788	594,173	1,016,102	960,234	1,020,053	1,234,383	1,386,989	1,963,166
	管理費	115,516	129,104	128,819	144,884	232,034	154,424	185,556	214,500	261,021	294,556
	おやさと整備費	360,000	463,000	374,491	509,000	450,011	814,650	1,164,757	1,302,646	1,322,249	1,813,664
	総合諸費	323,047	381,870	463,536	611,625	788,197	891,324	970,587	1,119,960	1,297,580	1,472,895
	予備費	10,744	3,580	1,206	3,128	3,436	13,514	3,471	—	263	4,290
	特別会計へi)	—	—	160,000	—	—	—	—	—	—	—
	繰入金ii)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	200,000
構成 の内 比 (%)	歳出総額	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
	布教伝道費	9.6	10.7	11.1	7.6	8.4	8.1	8.2	9.1	10.1	8.8
	文教費	45.0	41.2	41.0	51.1	49.8	40.8	40.0	35.9	33.8	34.0
	厚生費	8.7	9.3	9.6	9.5	8.5	15.3	9.8	9.7	9.5	7.9
	営繕費	12.3	13.5	13.0	10.2	13.6	12.1	12.8	14.4	15.1	16.9
	管理費	3.5	3.3	2.9	2.5	3.1	1.9	2.3	2.5	2.9	2.5
	おやさと整備費	10.7	12.0	8.4	8.7	6.0	10.3	14.6	15.3	14.4	15.6
	総合諸費	9.9	9.9	10.4	10.5	10.5	11.3	12.2	13.2	14.2	12.6
	予備費	0.3	0.1	0.0	0.1	0.0	0.2	0.0	—	0.0	0.0
	特別会計へi)	—	—	3.6	—	—	—	—	—	—	—
	繰入金ii)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1.7

資料出所：天理教道友社の『天理時報』に発表された天理教教庁一般会計の昭和46年度より昭和55年度までの歳出決算報告より作成。

i) 天理教校学園設立特別会計へ

ii) 体育館及び柚之内グラウンド等建設費特別会計へ

真柱室——真柱に直属し、真柱に関する事項を掌る。

教義及史料集成部——真柱に直属する機関で、(1)教義に関する諮問に答えること、(2)原典に関すること、(3)教義に関する編述並びに研究に関すること等に当たり、史料掛では教義に関する史料の蒐集及び保管に関することに携わっている。⁽²⁰⁾

次いで、天理教教会本部の活動の実態を探るために、最近10年間の天理教教会本部の歳入・歳出決算状況のうち、まず歳入決算を示すと、第3表の如くである。すなわち、決算額は昭和46年度が約57億円、昭和50年度が約298億2千万円、昭和55年度が約244億2千万円となっている。特に昭和50年度（昭和50年4月1日より昭和51年3月31日まで）の額が大きくなっているのは、昭和51年1月に教祖九十年祭が行われているためである。内訳では、例えば昭和55年度に例をとれば、御供金が約208億3千万円、前年度歳計剰余金が約22億8千万円、雑収入が約12億7千万円となっており、これらを構成比でみると、御供金が85.5%、剰余金が9.3%、雑収入が5.2%となっている。

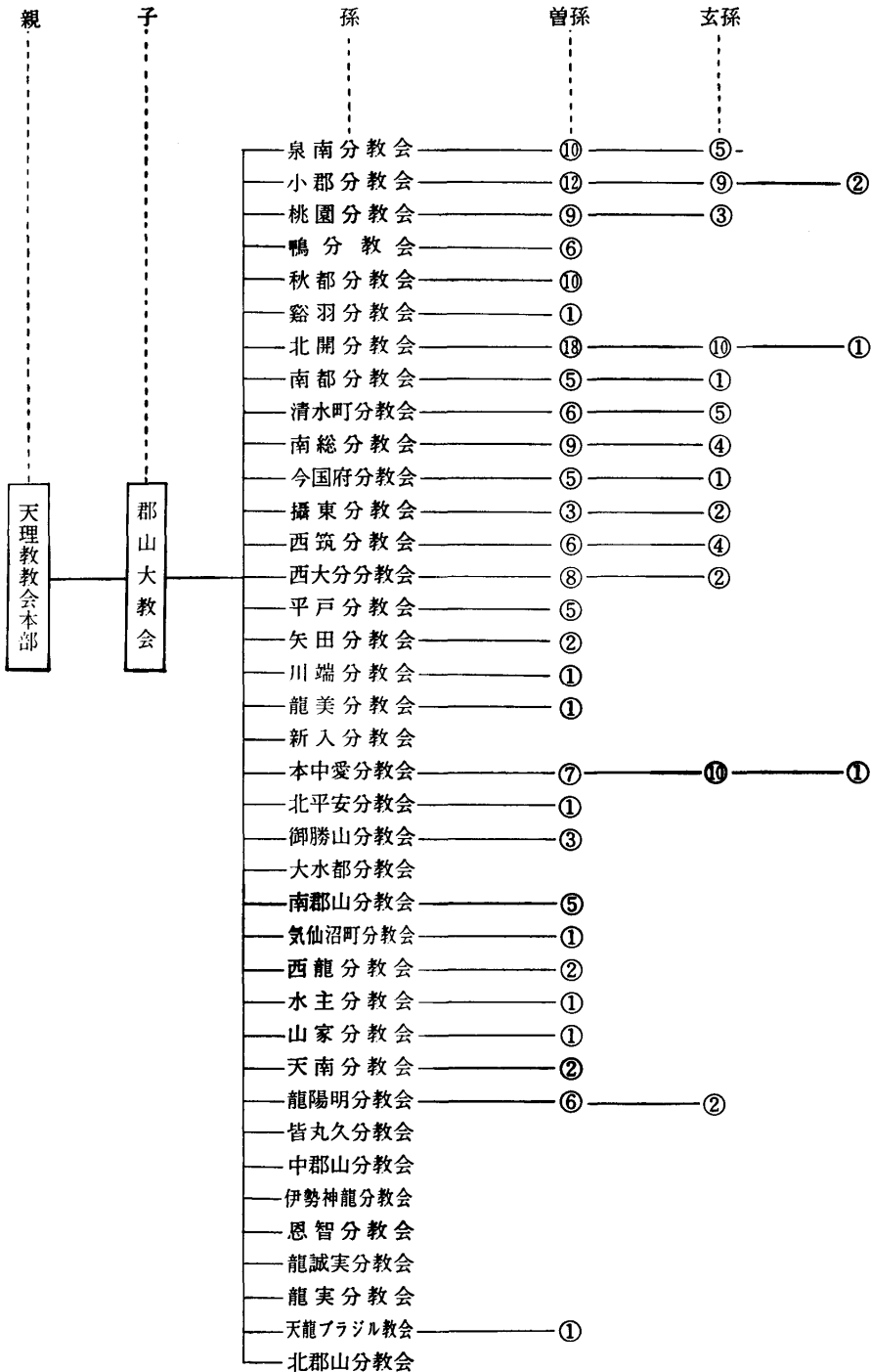
また、天理教教会本部一般会計の最近10年間の歳出決算状況をみると、第4表の如くである。まず、決算額については、歳出合計は歳入の場合と同じであって、昭和46年度約57億円、昭和50年度約298億2千万円、昭和55年度約244億2千万円となっている。そして、昭和55年度に例をとってその内訳をみると、回付金が約107億8千万円と一番多く、以下特別会計への繰入金総額75億円、やしき整備費約35億円、繰越金約19億7千万円、内事綜合諸費約6億3千万円と続いている。このうちの回付金は天理教教会本部組織の表統領の教務を遂行する機関である「教庁」への援助金と考えてよい。⁽²¹⁾ 次に、昭和55年度のこれらを構成比でみると、回付金が44.1%と高く、以下特別会計への繰入金30.7%、やしき整備費14.3%、繰越金8.0%、内事綜合諸費2.6%と続いている。そして、その年度により事情が異なるのでその推移はまちまちだが、特徴としては特別会計への繰入金があげられよう。教祖九十年祭及び教祖百年祭特別会計、おやさとかた建築特別会計、礼拝場建築特別会計とあるが、なかでも昭和50年度は62%が繰入金となっている。その他の年度（昭和46、47年度を除く）でも約25～45%の繰入金がある。

ところで、第4表の天理教教会本部一般会計の歳出決算状況はもっぱら「内統領」に関するものであるので、更に天理教教庁一般会計の最近10年間の歳出決算状況によって、「表統領」関係の活動の姿を探ってみると、第5表の如くである。まず決算額については、昭和46年度約32億7千万円、昭和50年度約74億9千万円、昭和55年度約116億5千万円となっている。そして、昭和55年度に例をとってその内訳をみると、文教費が約39億6千万円と一番多く、以下営繕費約19億6千万円、おやさと整備費約18億1千万円と続いている。次に、昭和55年度のこれらを構成比でみると、文教費が34.0%と高く、以下営繕費16.9%、おやさと整備費15.6%と続いている。

Ⅳ 天理教教会組織の本末ないし所属関係

さて、天理教教会本部の組織及び歳入・歳出の分析に別れを告げて、次にわれわれは教会本部と一般教会との関連、更には一般教会間の関係を探ってみることにしよう。そこで、天理教の教会組織上の本末ないし所属関係を示す図（系統図）を掲げると、第2図のようである。まず、教会はこれを分けて教会本部及び一般教会と呼び、一般教会は教会本部に所属する。更に一般教会は大教会と分教会とに分けられる。また教会設立時のいきさつによって、組織上の本末ないし所属関係が存在し、教会本部をその中心として直接の関連をもつ教会を直属教会と呼び、その直属

第3図 天理教郡山大会系統図（昭和53年1日1日現在）



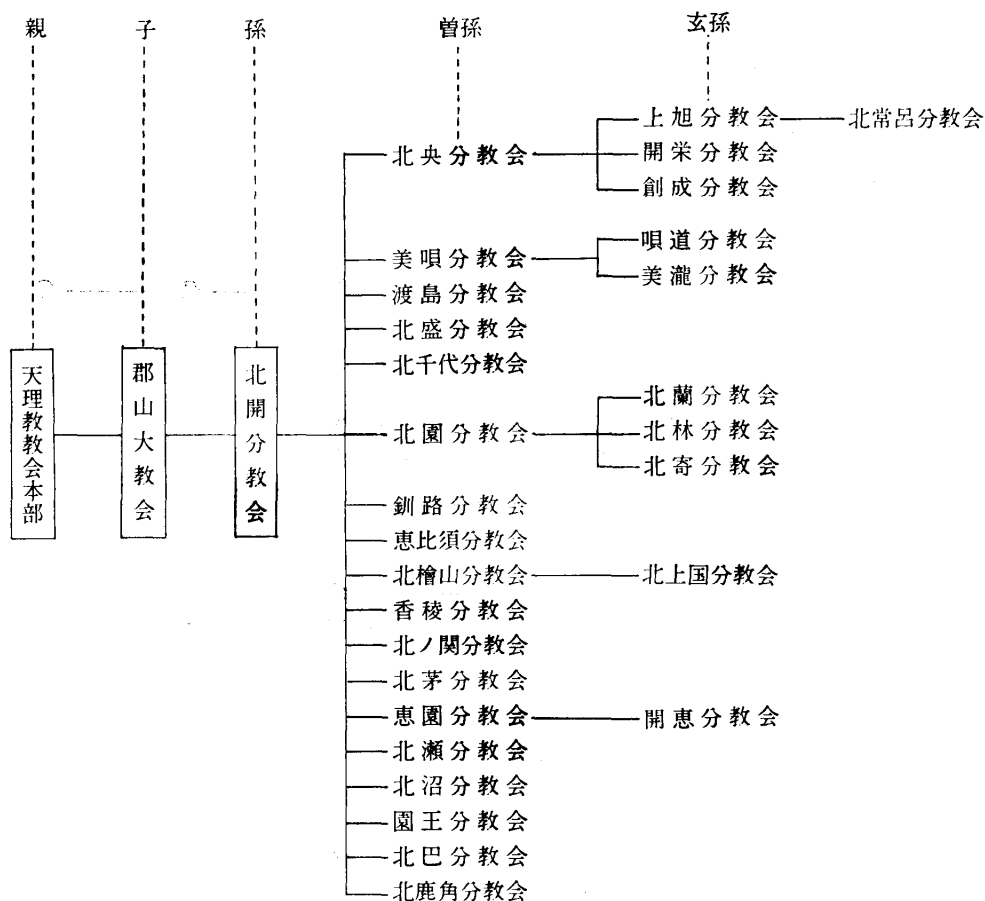
資料出所：天理教表統領室調査課編『天理教教会名称録』昭和53年直屬教会別系統表1～3頁より作成。

会間の統属関係がなぜ維持されたかが問題となる。この問いに対して、仏教教団では本末の統属関係を正当化する理論がなかったが、天理教では教会間の関係を『オヤコの理』で根拠づけたことが指摘されよう⁽²⁴⁾とかいった表現にみられるような、「親子関係」とか「オヤコの理」といった分析視角を援用して、実際の姿をみることにしよう。

まず、天理教教会本部直属の大教会の例として、最も早く大教会になった天理教郡山大教会の系統図を掲げると、第3図の如くである。つまり、郡山大教会の基礎は明治19年に置かれ、明治41年12月30日天理教の一派独立に伴い、いわゆる今日の天理教郡山大教会と改称されたのである。所在地は奈良県大和郡山市天理町で、昭和53年1月1日現在で部属教会を248有している。⁽²⁵⁾更に郡山大教会に所属する分教会のうち最大を誇る北開分教会の系統図を示すと、第4図の如くである。

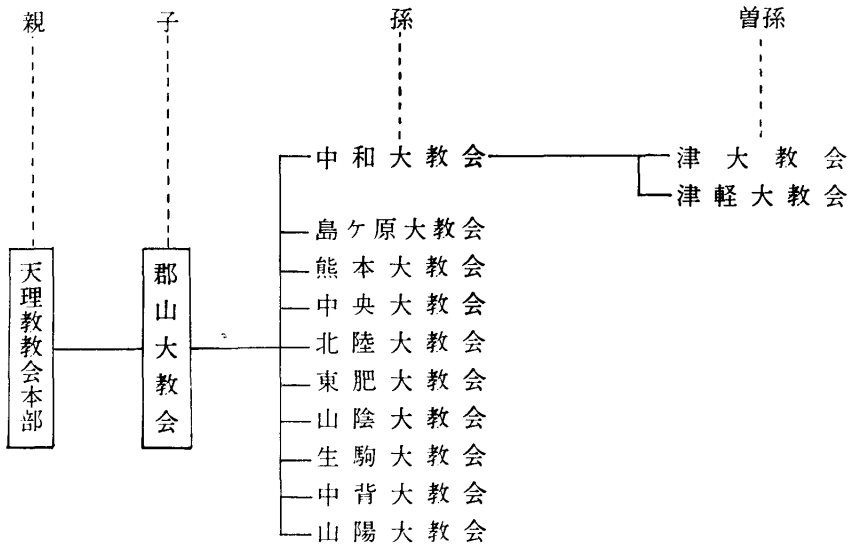
以上は天理教郡山大教会内の本末ないし所属関係の具体的な姿であるが、既に説明したように、

第4図 天理教北開分教会系統図（昭和53年1月1日現在）



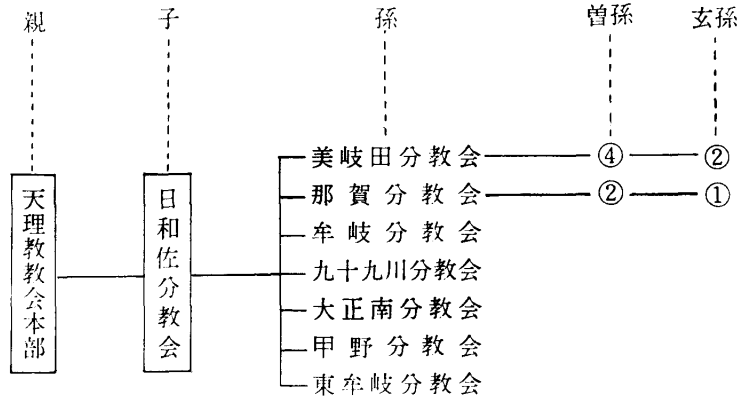
資料出所：天理教表統領室調査課編『天理教教会名称録』昭和53年直属教会別系統表2頁より作成。

第5図 天理教郡山大教会系統の大教会系統図（昭和57年3月31日現在）



資料出所：天理教表統領室調査課編『天理教統計年鑑』昭和57年より作成。

第6図 天理教日和佐分教会系統図（昭和53年1月1日現在）



資料出所：天理教表統領室調査課編『天理教教会名称録』
昭和53年直屬教会別系統表191頁より作成。

大教会設立基準に達した分教会は独立して、教会本部直属の大教会へと昇格することも考えられる。例えば、同じ郡山大教会から分かれた大教会、仮に郡山大教会系統の大教会と呼ぶことにするが、現在郡山大教会を含め13ある。これらの本末ないし所属関係を示すと第5図の如くである。天理教では、もちろんそれぞれの大教会は形式的には教会本部直属であるが、実質的にはこのように大教会同志においても、本末ないし所属関係があるといえる。

次いで、天理教教会本部直属の分教会の例として、明治25年11月6日設立され、約九十年の歴史を誇る徳島県海部郡日和佐分教会の系統図を示すと、第6図の如くである。つまり、日和佐分

教会は昭和53年1月1日現在で部属教会19を有していることが判明する。

V お わ り に

最後に、本小稿はあくまでも現代天理教の構造と機能とを分析することに終始した。といっても、天理教の組織を動かしているのは人であるが、その具体的な人の分析にまでは残念ながら入ることが出来なかった。また、天理教一般教会に関する社会形態学的研究ともいえる地域別、都道府県別、市部・郡部別分布状況についても、既に詳しい資料を用意しているが、紙数の関係もあって他日稿を改めて記述することにしたい。更に天理教の教義や天理教の歴史的発展過程に関する研究も他日を俟つことにしたい。

注

- (1) 中山正善『「神」「月日」及び「をや」について』天理図書館、昭和10年、1～84頁。Henry van Straelen, *The Religion of Divine Wisdom: Japan's most powerful religious movement*, Veritas Shoin, 1957, pp. 1～236. 深谷忠政『天理教——^{だものおとし}全人類の最後に求めるもの——』天理教道友社、昭和39年、1～238頁。西山輝夫『天理教とは』上巻、天理教道友社、昭和41年、1～250頁。同『天理教とは』下巻、天理教道友社、昭和43年、1～266頁。諸井慶徳「教義学概論」『諸井慶徳著作集』第6巻、天理教道友社、昭和46年、14～132頁。西山輝夫『天理教入門』善本社、昭和48年、1～239頁。上田嘉成『天理教教典講習録』天理教道友社、昭和55年、1～306頁。天理大学おやさと研究所編『天理教概説』天理大学出版部、昭和56年、1～357頁。天理教道友社編『天理教——教理から現況まで——』天理教道友社、昭和56年、1～399頁など。
- (2) 高木宏夫「宗教教団の成立過程——天理教の場合——」『東洋文化研究所紀要』第6冊、東京大学東洋文化研究所、昭和29年、265～338頁。高野友治「天理教の伝播と既成教宗団との関係」『天理大学学報』第26輯、天理大学人文学会、昭和33年、21～40頁。笠原一男『転換期の宗教——真宗・天理教・創価学会——』日本放送出版協会、昭和41年、1～286頁。高野友治「日本宗教分布の研究（序）——天理教の伝道に關聯して——」『天理大学学報』第65輯、天理大学学術研究会、昭和45年、1～19頁。飯田照明「欧米人による天理教の研究——文献を中心として——」『やまと文化』（天理大学おやさと研究所編）第50号、天理大学出版部、昭和45年、135～169頁。大久保昭教『外国人のみた天理教』天理教道友社、昭和48年、1～360頁。菱山謙二「天理教教団組織の研究」『社会学ジャーナル』（筑波大学社会学研究室編）第1巻第1号、昭和51年、52～75頁、第2巻第1号、昭和52年、19～35頁。小栗純子『日本の近代社会と天理教』評論社、昭和51年、1～308頁。福井直秀「日本新興宗教論序説——天理教の成立をめぐる——」『京都大学教育学部紀要』XXIV、昭和53年、193～203頁。島蘭進「疑いと信仰の間——中山みきの^{たす}救いの信仰の起源」『筑波大学哲学・思想学系論集』昭和53年、117～145頁など。
- (3) 西田和夫「天理市の研究第1報——宗教都市丹波市の発達とその構造——」『奈良学芸大学紀要』第4巻第3号、昭和30年、79～92頁。伊藤郷平・梅田幸房「宗教都市の分析法試論——天理市を事例として——」『奈良文化論叢』（奈良地理学会編）昭和42年、494～514頁。内田秀雄「詰所の地理学的研究——本願寺と天理教の場合——」『奈良文化論叢』（奈良地理学会編）昭和42年、515～527頁。桑原公徳「宗教都市としての天理市の性格」『花園大学研究紀要』創刊号、昭和45年、45～82頁など。
- (4) 村上重良『現代日本の宗教問題』朝日新聞社、昭和54年、27頁。同『近代民衆宗教史の研究』法蔵館、昭和38年、87頁以下。
- (5) 井門富士夫「教団組織論序説——産業社会における教団体制の変容——」『東洋文化研究所紀要』第34冊、東京大学東洋文化研究所、昭和39年、130頁。

- (6) この点に関して、『ジュリスト増刊総合特集現代人と宗教』No. 21、有斐閣、260頁に次のような一文が出ている。参考になるので、やや長文ではあるがここに引用しておく。つまり、わが国では、一世帯に神棚と仏壇をあわせもち一戸の家が氏子であると同時に壇家であるというような重層信仰、多重所属、それも家単位での多重所属が、かなり一般的であるという事情がある。しかも、新宗教の信者が、日常活動では当の団体の活動に参加する一方、葬儀、婚礼などの社会儀礼や、家の墓の維持などに関しては、既成の社寺に依存するというような場合がみられる。したがって一人の人間が、宗教団体と係わりを持つことは二重三重にもなり得るのである。しかも、日常は宗教団体と密接な係わりがなくとも、何かの機会に宗教団体と係わりをもつような人々を、宗教団体の側からすれば明らかに信者でないと切り捨てていくことは難しい。例えば、転居して何年も音信不通であったものでも、家族に死者が出たりすると、菩提寺との関係を復活し、壇家としての努めを果す場合も少なくない。また、宗教団体のなかには、脱落信者を計算上除外しない場合も多いが、しかし不活動信者のなかには、教団の働き掛けなどで復活する潜在的信者もあるので、一概に不当とはいえないものがある。このように考えれば、宗教法人の信者に関する報告も必ずしもまったく根拠のないものとはいえないことが知られよう。その一見誇大な数字は、実はわが国の宗教的伝統、文化的傾向を如実に示すものがあり、そこに貴重なデータをみる学者もいるのである、と。
- (7) 井門、前掲論文、128頁。なお、「布教を生命とする天理教」については、青地晨「天理教」『中央公論』第75年第7号、昭和35年、187～201頁。同「天理教の火は消えたり——三代目の新興宗教——」『展望』No. 112、昭和43年、129～143頁などを参照されたい。
- (8) 詳しくは、天理大学おやさと研究所編『天理教事典』（天理教道友社、昭和52年）における「教会本部」の項（247～252頁）を参照されたい。
- (9) 天理大学おやさと研究所編『天理教事典』天理教道友社、昭和52年、443頁。
- (10) 天理教教会本部編『天理教年鑑』天理教道友社、昭和55年、16頁。
- (11) 天理大学おやさと研究所編『天理教事典』144頁。
- (12) もともと「ちば」という言葉は場所、地所、地点といった意味である。ところが、天理教ではこの言葉を人間創造の元の地点、天理王命の鎮まる地点という意味に用いている。したがって、人類救済の源泉である「ちば」こそは、天理教信仰の中心であり、人類の親里である。また、天理教では親の膝下に居る意味において、「ちば」に参拝することを、敷入りのような親しさ、喜び、あこがれの気持ちでもって、「ちばに帰る」と親しみを込めて呼んでいる。
- (13) 天理大学おやさと研究所編『天理教事典』250～251頁、291～295頁。
- (14) 天理教道友社編『天理教——教理から現況まで——』363頁。
- (15) 天理教教会本部編『天理教年鑑』177頁。
- (16) 同、157頁。
- (17) 同、174頁。
- (18) 同、186頁。
- (19) 天理教道友社編『天理教——教理から現況まで——』377頁。
- (20) 天理大学おやさと研究所編『天理教事典』249～250頁。
- (21) 因にここで、天理教教庁一般会計の最近10年間の歳入決算の状況を見ると、第7表の如くである。つまり、この表より、例えば昭和55年度の天理教教会本部の歳出のうち、回付金約107億8千万円がそのまま天理教教庁歳入に回っていることが判明する。

第7表 天理教教庁一般会計の最近10年間の歳入決算状況

年度		46	47	48	49	50
項目						
決 算 額 (千円)	歳 入 総 額	3,269,379	3,855,420	4,464,545	5,852,487	7,488,346
その内訳	教会本部より回付金	2,949,414	3,523,945	4,105,063	5,459,246	6,881,528
	教 費 金 収 入	51,744	56,889	55,133	55,929	90,818
	幣 帛 料 収 入	27,421	30,339	29,626	31,444	51,019
	雑 収 入	240,800	244,247	274,723	305,868	375,251
	そ の 他	—	—	—	—	i)89,729
構 成 比 (%)	歳 入 総 額	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
その内訳	教会本部より回付金	90.2	91.4	91.9	93.3	91.9
	教 費 金 収 入	1.6	1.5	1.2	1.0	1.2
	幣 帛 金 収 入	0.8	0.8	0.7	0.5	0.7
	雑 収 入	7.4	6.3	6.2	5.2	5.0
	そ の 他	—	—	—	—	1.2
年度		51	52	53	54	55
項目						
決 算 額 (千円)	歳 入 総 額	7,922,412	7,962,719	8,516,670	9,157,392	11,648,062
その内訳	教会本部より回付金	7,303,357	7,295,054	7,827,664	8,437,114	10,779,240
	教 費 金 収 入	91,632	94,187	92,893	94,454	92,904
	幣 帛 料 収 入	74,564	60,415	49,025	45,119	51,198
	雑 収 入	452,860	513,064	547,088	580,705	724,721
	そ の 他	—	—	—	—	—
構 成 比 (%)	歳 入 総 額	100.0	100.0	100.0	100.0	200.0
その内訳	教会本部より回付金	92.2	91.6	91.9	92.1	92.5
	教 費 金 収 入	1.2	1.2	1.1	1.0	0.8
	幣 帛 料 収 入	0.9	0.8	0.6	0.5	0.4
	雑 収 入	5.7	6.4	6.4	6.3	6.2
	そ の 他	—	—	—	—	—

資料出所：天理教道友社の『天理時報』に発表された天理教教庁一般会計の昭和46年度より昭和55年度までの歳入決算報告より作成。

i) 特別会計天理教校学園設立費剰余金

- 22) 天理教道友社編『天理教——教理から現況まで——』344～345頁。
- 23) William H. Newell and Fumiko Dobashi, Some Problems of Classification in Religious Sociology as Shown in the History of *Tenri Kyokai, The Sociology of Japanese Religions*. (ed. Kiyomi Morioka and William H. Newell) E.J. Brill, 1968, p.p. 94～97.
- 24) 森岡清美「宗政論——続・新宗教の場合——」『中外日報』昭和54年6月2日、1頁、及び昭和54年6月5日、1頁。
- 25) 天理教表統領室調査課編『天理教教会名称録』昭和53年、1～3頁。

A Study on the Organizational Structures of
Japanese Religions: The Case of *Tenrikyo*

Shin OGASAWARA

Department of Sociology, Nara University of Education, Nara, Japan
and

Shinichiro FUKUCHI

Tenri Elementary School, Nara, Japan

(Received April 27, 1983)

This paper is intended to elucidate the following three points: (1) the scales of religious organizations in Japan and the position of *Tenrikyo* Organization in them, (2) the organizational structure of the Headquarters of *Tenrikyo* and settlements of revenues and expenditures for the last ten years (1971–1980) of their general accounts, (3) the relation of roots and branches or belongings in the organizational structure of *Tenrikyo* Churches, to analyze the structure and functions of modern *Tenrikyo* Organization.